

銀

賞

『鯨のオーエン』

『鯨のオーラン』

福島県 尚志高等学校二年 七海千夏

董青石の青より青い、厚い雲のかかる海に、鯨の人魚が暮らしていました。

彼は名前を与えられるよりも幼いときに群れからはぐれ、暖かい海からこの冷たい海に流されました。猛る波や荒い潮に削られながら、なんとか青年の歳まで生き延びた彼。孤独の彼の心には、いつも氷柱ひづらが刺さったような穴が開いていました。彼はその心の小さな穴を、見て見ぬふりをしてやり過はしてきました。しかし彼は時々こんなことをひとりじめるようになりました。

「僕はなぜ、なんのために生きているのだろう」

その疑問は彼を深淵しんえんに誘うと同時に、きらきら輝いていました。光のない深海で、彼を好奇と探求に駆かけ立てることに必死だった幼少の頃にはあり得ないほど豊かに、田まぐるしぐ心を動かしました。「きっと何かを成するために一人でも生き残つた、残されたのだ」。その小さな結論が彼をいつそう強く生かしました。

ある日のこと。彼はいつもより深く潜もぐりました。自分を取り巻く暗闇くらやみも、子供のことは恐ろしくて仕方なかつた重たい水の流れも、希望ある今の彼には怖くありません。

彼は目線の濃い藍こあいの中に、白い光があるのを見つけました。それは近づくほど大きく、煌々と輝くのでした。彼は光の奥底に大きな影が揺らめいていたことに気づき、田を見張りました。それは人魚ではなく、岩でもな

い、マストが折れて胴の割れた船の亡骸なきがらでした。彼は初めて見る沈没船に驚きながら、そしておつかなびつくへり、それでも抑えきれぬ好奇心のままに近づきました。光源は、折れたマストの先に掛けたランプでした。暗がりで見る光の特別な神聖さに少しの間見惚れ、そして胴の割れ目から沈没船の中へと進みました。彼は船もランプも知りませんでした。しかし恐れず、未知に魅了みりょうされるままに進みます。まるで導かれるように、彼の為に舗装された道があるように。

ランプの光が僅かしか届かない船室の中は、荒れきつていました。豪華な家具の彫金ちようきんは錆びついて輝きを失い、壁の絵は傾き褪あせっています。色彩のない世界で彼は、孤独な旅路の最中には見られなかつた数々に圧倒されていました。そして彼は絵に惹かれ、しっかりと見てみたくなり、派手に額装がくそうされた大きな絵をランプの光の下に持ち出しました。そこに描かれていたのは、奇怪な生き物です。自分によく似た上半身を持ちながら、身体の下半分は魚の形をしていません。腕より太くて長い肢の先に、歪な手のような部位が続いている、奇妙な生き物でした。彼はまじまじと見つめます。

「これは、なんだろ？ 海の中では見たことがない」

誰にともなくささやくと、

「それは、にんげんという」

暗闇の向こうから、そう答える声が聞こえました。その声は低く、艶もなくおそろしく、そして鯨の彼にとつては久しく聞いていなかつた他者の声でした。彼は驚いて声の方を向きます。すると闇からランプの光芒こうぱうの中へ、絵画の中の生き物によく似たものが進み出ました。

「私の家に何の用だらうか」

照らし出されたのは肌と髪の白い瘦せた男でした。じとじと鯨の彼を見んで、不機嫌そうにしています。鯨は氣まずやうわざつた声で答えました。

「僕は狩りをしていたら、物珍しくも光が見えたので興味のまま立ち寄つてしまつたのです。」不快な思いをさせてしまい申し訳ない

「別に家に勝手に上がり込んだことは怒つていません。問題はその絵を見て、何を思ったかだ。おまえは、その絵に何を思った？ 何を見た？」

男は厳かに問います。鯨は、やけに警えてからいへつて言いました。

「不思議な気持ちです。僕の知らないことはかりで」

「浮かんだ疑問を言ってみなさい」男は答えます。

「あなたは、この絵に描かれている『にんげん』ですか？ この、奇妙な形の、鱗のない一股の尾ひれは何ですか？ そして彼らはどこに生きているのでしょうか、水の中ではない場所にいるように思えます」

すると男は愉快とうつうに笑つてから言いました。

「驚いた。おまえは人間を知りぬままその年まで生きたところのか」

「ずっと小さいころに群れと離れてしまい、勉強をしたことがないのです」

「なるほど」わかつた、その疑問すべてに答えよつ、絵があつた部屋で話をう

上機嫌な男は鯨の彼を先ほどのつす暗い部屋に招きます。そして腐りかけた鉄骨に腰かけて言いました。

「面白紹介をしよう。私の名前はアルブレヒト、絵の中の生き物と同じ『にんげん』で、一千年前に『にんげん』の世界に見切りをつけた深海にやつてきた魔法使いだ。醜くも永遠を求める強欲な男だと思へ」

「にんげんというのは一千年も生きるものなのですか？」

鯨は驚いて言いました。

「いいや、私が特別な魔法で生き延びていいだけだ。ふつうは皆百年経たずに死ぬ」
男は「残酷だろ？」と自嘲のよつに笑い、ゆつたりと話を続けます。

「一つ目の質問には答えた。次の話をしよう。おまえの言ひ、鱗の無い二つに裂けた尾ひれは『足』と名がついている。人間の世界はひれでは移動ができない。水の代わりに空気というもので満たされている。空という蓋と地面という底がある世界だ」

話を聞いて鯨は、やるきらりと目を輝かせました。それを見た男は嬉しくなり、やるに多くの話を語りました。人間の世界には多くのクニーというヒトのまとまりが存在したこと、肌の色も田の色もやまやまないと、それによつていさかいが起こつたこと、人間は鯨たち人魚のことを架空の生き物だと思つてゐること。そして男は語りました。「人間の世界には、人魚が人間になる物語がある。女人魚が魔法で人間になつて、恋をした男のもとに向かう物語だ。悲しい話だがね」

それを聞いた鯨は魂を震わせました。そして言いました。

「それ、僕もやつてみたいと思ひます。陸の世界へ、行ってみたい」「ほう。おまえも人間になつてみたいと言つか」

「僕はずつと独りぼっちでした。でもにんげんの世界には、数えきれないほどの人がいる。つまり、独りぼっちじゃなくなる、といふことですね」

鯨は希望に満ちた單口で言いました。

「それに、この暗い海の底にはないものがたくさんある。僕、いつも考へていていたんです。どうして自分は生きているのだかのと。その答えが、少し見えた気がします。知らない世界に行くために生まれて、そこで誰かと出会うために生かされたんです。魔法使いさん、どうか僕をにんげんにしてくださいませんか。なんでもします」あまりにも、輝く声でそう言いました。男は声のきらめきに圧倒され、驚いて、ゆっくりと問いかけてきました。「軽々しく『なんでもする』なんて言つんじゃない。けれど、その思いが本気ならば、私も答えよう。具体的に聞こえ。おまえは人間になつて、何を望む？」

鯨は、真剣な眼差しで、逸る心を押さえつけて答えます。

「未知の世界で、一生愛する友達を、誰かを探したいです」

男は頼もしく微笑みました。そして、部屋の隅に転がっていた銀色の杖を拾い上げて言いました。「良いだろう。おまえを人間にしてやる。でも無償じゃない、対価がいる、そして人間になるにも段階を踏まなくてはいけない」

男は言い聞かせるように話を続けます。

「私の魔法でおまえを人間の形で生きながらえさせんにはせいぜい百年が限界だ。百年以内に誰かから愛を与えるればお前は本物の人間になる」

鯨は力強く頷きます。そして、ふたつ問いました。

「本物の人間になる前は何になるのですか？ そして、百年誰からも愛されることはなかつたときは？」
「本物の人間になる前は、眞珠の人生になる。人格と記憶は眞珠の中に混ぜ込まれ、しゃべることもできる。そして百年誰からも愛されなかつたら」

男は「息ついて、悲しそうに言いました。

「真珠の体の真ん中、心臓のあたりに小瓶こびんが入っている。中身は強酸だ。これが破裂して、真珠の体を溶かす。おまえは死ぬ」

「どうしてそんなこと……？」

「生まれ変わるための魔法に失敗したときの対価は、命だからだ」

鯨は息を呑みました。あり得るかもしない残酷な未来に、背中せなかが冷たくなりました。けれども鯨は、弱氣よわいを押し殺して、ただ一言、

「それでも、陸の世界を見たい」

と答えました。男は「そこまで言われちゃあしようがない」と杖をかざし、言いました。
「なりが魔ま法をかけよう」

鯨は魔法にかけられ、光に包まれました。段々と意識が薄れ、そして自分の身体からだが透けていくのを感じます。最後に男は、光の中の鯨に聞きました。

「そうだ、おまえ、名前は？」

鯨は答えます。「僕には名前が無いのです」と。

すると男は笑つて言いました。

「なら名前付けよう。おまえはオーホン。名前はオーホンだ」

オーホンが田を覚ましたのは、柔らかな真白の砂浜でした。肺と鼻で息をするのだとアルブレヒトに教わった

ことを思い出し、赤子のよう^{あかご}に覚束^{おぼつか}ない、初めての呼吸をしました。それから上体を起^くして座り、ぼろの口一^{すべ}づをまとつた、人間になつた自分の身体を眺めます。真珠の純白に輝く滑らかな肌は、かつて尾ひれだつた下肢^{かし}にできた「足」まで覆^{おお}つていきました。桜貝の爪^{つめ}、肩まで伸びた黒い髪。形だけは、絵画で見た通りの人間になつていきました。オーランはゆっくりと、絵画の人間たちがそうして立つように立ち上ります。一步一歩、歩くたびに沈み込む砂浜を歩いてゆきます。全身に感じる風に、潮とはまた変わつた心地よさを覚えました。そして空を見上げます。深海の濃紺^{のうこん}に似た色彩が頭上^{かぶ}いっぱいに広がります。そこには海の表層に^{はるひ}弾く泡によく似た、無数の小さな光^{みの}が明滅を繰り返していました。

「そつだ、にんげんに会いに行かなきや。とにかく海から遠い所へ」

オーランは呟^{つぶや}きました。そして、重たい真珠の身体で海を背に歩き始めました。

深い、深い夜の中をそのままオーラン。真珠の肌は満月の光を受けて白く輝きました。歩く道は砂浜から木々の茂る山へ、緩い傾斜^{けいしゃ}を登つてゆきます。やがてその傾斜が平らになつたとき、視界が開けました。眼前に広がるのは、傾いた満月の光を受けて輝く真夏の野生^{じやうじや}でした。光合成を一休みして深く呼吸する花々、束ねた静謐^{せいひつ}に僅かなノイズを含んだ波の音、微熱の風。オーランは圧倒され立ち尽くしました。無言のうちに流れてゆく時間は、静かに視界に色彩を映してゆきます。やがて空が燈^{だいだい}に焼けて、琥珀^{こはく}の糸がたわみ、空が珊瑚礁^{さんごじょう}の海より真つ青になつて太陽が白く高くなるまで立ち尽くしていました。オーランは真珠の胸が、興奮でドキドキするのを感じました。

「陸の世界は、こんなに色に溢^{あふ}れていて美しいんだ」

オーホンはそのまま山へと、また真っすぐじに歩き出しました。人間の山ねどりを探し。

オーホンは山を越えて、流れ着いた浜の裏手にたどり着きました。まだ人間と出会っていません。陸にやつてきて、一日は誰とも出会えませんでした。

一日田。オーホンはある「」とに気がります。「」の島はひじく小ぢく、島を取り囲む砂浜を一周するのに半日とかかります。胸に一抹の不安を抱きました。

一日田、いよいよオーホンは「」の島の真実を知つてしましました。「」の島は無人島なのです。人間がいないのです。不安は大きくなる一方でした。

「だれか、遠いどこのから船がやってきて僕を見つけてくれる」 そういうふうに思ふと、自分を奮い立たせました。

四日田。オーホンは暇を持てあまして、山に入りました。「」これまで見ていない所を見てまわらうと。そしてオーホンは奇妙なものを見つけました。丸い金属の蓋が地面に張り付いているのです。それを無理やり退かしてみると、地下へ通ずる梯子^{はしざ}が下りていました。なにかあるに違いないと中へ降りてゆきます。穴の中は無機質な白い光で満ちていました。

地面に足を付けたとき、初めてきちんと穴の中全体を見渡しました。そこはまるで、山一つくり抜いて作ったような秘密基地でした。きょろきょろと辺りを見渡しながら歩いていくと、オーホンの背丈よりも大きな機

械にぶつかりました。それは円錐の形をした金属の塊です。オーエンはそれを見上げました。そのとき、機械の影から誰か小さい子供が飛び出しました。

「きみ、誰？」

その誰かはそうオーエンに問いました。朝焼けの金に似た髪、オーエンより小さな体。それは人間によく似ていました。が、オーエンのような、硬そうな体をしていました。オーエンはそのだれかに問いました。

「きみ、にんげん？ 僕はオーエン。元人魚で、いまは人形だ。僕は僕を愛してくれるにんげんをさがしている」すると目の前の彼は答えました。

「人間は遠い昔に滅びたよ」

信じがたくも確かにその言葉は、秘密基地に静かに響きました。

「戦争で人が減り、隕石と温暖化で陸地が減った。陸地が減るから生き残りをかけてまた戦争が起きて、国が最後の一つになるまでそれを繰り返したんだ。この小さな島は、最後の国になどり。この地球で最後の陸地」

オーエンは彼が何を言っているか理解できず、いえ、理解はしましたが信じられずに黙り込んで下を向きました。そこに追い打ちをかけるように、目の前の彼は続けます。

「そしてね、最後に残った国は宇宙にフロニーを作つて、人間を選んで送つたんだ。そして選ばれなかつた人たちはみんな海に逃げた。植物プランクトンと融合して、浅い海でなら生きていけるようになったんだ。つまりこの星に君が探している人間は、いない。ぼくは地球の滅びが記された『ゴールデンレコード』と一緒にいつか宇宙に旅立つんだ……親切なだれかが手を貸してくれる日が来れば。ぼくは遠い宇宙を愛している、人型ロボット探査機ハラパン、形ある心を持たされた機械」

怒濤の情報量に、オーエンは田が回る感じをしました。しかし時間をかけて理解したこの星の惨状に、いつそ言葉を失いました。しかしハラパンの言葉を思い出すつた、無言の失意にひとすじの光が差しました。ハラパンは宇宙を愛すると言いました。何かを愛する心があるといつぱりとは、自分を愛してくれぬかもしれない可能性が残っているからです。オーエンは勇気を出して聞きました。

「僕は誰かに愛されなきや百年後に死んじゃうんだ。ハラパン、僕を愛してくれる?」
するとハラパンは少し考えてから答えました。

「愛とは技術さ。長らく人に会っていないのは、愛がわからない。だからしづらしく一緒にいてみよ。」
その言葉にオーエンは微笑みました。

そしてその後、二人は十年間を一緒に過ごしました。お互いのもつ全てを語り合い、夜になれば星を見るだけの十年間でした。それでもお互いが初めての友達になる一人には、その日々は夢のように輝いて記憶に刻まれ続けました。

「ぼくに記録された、人間の描いた模様は悲しみで閉じられたけど、その線と点は希望で出来ていた。終わりがあるから美しい命たちの希望の叫びを、ぼくは託されている」

十年の会話の中で、ハラパンは何度もそう言って空を仰ぎました。宇宙に思いを馳せる彼の瞳は不思議な色に輝きました。それは、ハラパンの心の動きを映しているように思われました。

そして十年と一田田の朝、オーエンはハラパンに問いました。

「どうだい、僕のこと、愛せそうか?」

するとハラパンは申し訳なさそうに答えました。

「ごめんなオーラン。僕の心は、宇宙と人間以外を愛するようには作られていないみたいだ。きみは人魚だから、愛の対象にインパートされていないのや」

それを聞いたオーランはひどくショックを受けました。田の前の彼は自分を愛さない。その事実は、オーランの死を意味します。しかしオーランはハラパンと過ぎした十年間を思い出すと、初めてできた友達を尊ぶ思いで精一杯でした。そしてオーランは言いました。

「なら僕は、君が宇宙と人間を愛する手伝いをしたい。僕が君を宇宙まで送るよ」
「きみ、ぼくのせいで死んじゃうんだろ？ ならぼくなんか酷いやつのためにそんなことしなくていいんだ、きみは」

「こうや、やりせてよ。何もしないで死ぬよりずっとこう」

オーランは失意を飲みこみ、信念と希望に満ちた田で言いました。ハラパンはその瞳を見て「ありがとうございます」と心から答えました。

その次の朝からオーランは、先人たちが残した手引書の手はず通りに、円錐の機械を点検するといろから全てを始めました。円錐の機械の名はロケットといふこと、打ち出すには燃料が必要なこと、精密にすべてを決めなければいけないこと。あらゆる問題を解決するために、オーランとハラパンは八十年かかりました。作業で眠れない夜と、計算だらけの朝を超えてゆきました。オーランの原動力は、ハラパンに幸せになつてほしいという一心でした。

そしていよいよ、出発の朝を迎えるました。歴史を刻んだゴールデンレコードを胸にしまったハラパンはロケット

トに乗り込みます。オーエンは秘密基地の小さな管制室からハラパンに最後のお別れを告げました。

「や）よならの前に教えてほしい。君、今幸せかい？」

そう言つてレバーを倒すと、山が半分に割れて秘密基地の床がせり上がり、ロケットがむき出しになりました。そして島にカウントダウンが響きます。ハラパンは言いました。

「ありがとう、オーエン。幸せだよ」

「それなりいいんだ。ほつとした」

大きな地響きと共に、ロケットは旅立ちました。オーエンはその光景を、ロケットが星になつて消えるまで笑顔で見送りました。

静かな夜のどばりが、二人きりだった世界を包んでいます。オーエンは力が抜けてふらふらと立ち上がり、そのままゆっくり浜辺へ歩きだしました。

オーエンは月光を受けて青白く輝く砂浜に横たわり、身体を丸めて泣きました。このあと自分がどうなるか、思い出したのです。真珠の頬を滑る水は、海と同じ味がします。もしも引き留めていたら、と何度も後悔しました。古くなってしまった記憶を追憶しても救われるのは分かりきっています。それでも迫りくる死を前に、恐ろしくて泣きながら愛を祈りました。

しかし彼は祈る傍ら、自身のしたことを認めていたのです。誰も救われないよりは、地球最後の希望を空の彼方に送り出したことを「良かった」と思っていたのです。その感情は後悔とぶつかり、真珠の胸を内側から焦りました。オーエンは残った長い時間を、秘密基地と浜辺の往復で過ごしました。それは初めて誰かに寄り

添つた、尊い記憶のなつかしさをなめることでした。残された十年の時間は心を削りながら、しかしあつといつ間に過ぎてゆきました。オーランはやがて死を、終わりを覚悟しました。かつての語らいの中で、終わりがあるから命は美しいのだと語ったハラパンを思い出しながら、最後の眠りにつきました。

百年と一千年、オーランは白い砂浜で田を見ました。

ないはずの朝を、オーランは迎えたのです。オーランの真珠の肌は柔らかい人間の皮膚に変わり、肉の体と、息をするたびに広がる胸を手に入れました。オーランは驚き、喜び、涙を流しました。そして空を仰ぎ、言いました。

「もしかして、君、僕を愛してくれたのかい？」

その言葉は青い波間に消えました。

一方その「」のハラパンは、遠くなつた地球を見つめて語りました。

「きみがぼくの幸せを願つてくれたこと、これつてぼくへの愛だったのかしい。だとしたらきみを幸せにできなかつたぼくの、この後悔も愛なのかな。ゆるしてくれ、ぼくはやつや、ぼくを幸せにしてくれたきみに幸福があるように祈つたばかりだ」

そしてまたを閉じて、つぶやきました。

「きみを幸せにしたいと、今から地球に戻つて語に行つたり、きみは怒るかしい」

